

74. 上腕骨近位端骨折患者における術後機能の追跡調査

高知赤十字病院リハビリテーション科¹⁾，整形外科²⁾

○黒川 順子¹⁾ 松村 雅史¹⁾ 八木 啓輔²⁾ 十河 敏晴^{1) 2)}

【目的】

上腕骨近位端骨折患者における術後機能を，関節可動域（以下 ROM）を中心に追跡調査を行い，急性期における，理学療法を検討した。

【対象】

2008年1月～2010年3月の間に，骨接合術（PHILOS）を施行した23例（男性1例，女性22例）。平均年齢は70歳（40～91歳）。骨折型は，Neerの分類で，2part：7例，3part：10例，4part：6例。経過観察期間は，術後から平均188日（115～239日）であった。

【方法】

- ① 肩関節挙上 ROM（退院時，3か月後，6か月後）
- ② 手術から ROM 訓練開始までの期間
- ③ 術後経過中に生じた骨接合部の合併症

【結果】

- ① 6か月後の肩関節挙上 ROM は平均 121°（2part：146°，3part：103°，4part：99°）。骨折型が複雑になる程低値を示し，6か月後の成績不良者の割合が増加する傾向にあった。
- ② ROM 訓練開始までの期間は，骨折型が複雑になる程長く，安静期間が長期化する傾向にあった。
- ③ 経過中に骨頭内反転位や大結節転位等の合併症を生じた割合は，10例/23例で全体の43%（2part：28%，3part：20part，

4part100%）であった。4 part で高い割合で合併症を発症した。

【考察】

6か月後の平均 ROM は，3 part・4 part においては，諸家の報告と同様に悪く，4 part では合併症を生じる割合も高かった。現在当院では，理学療法は術前より行い，術後は可能なものは，直後より振り子運動，平均10日目には他動運動を開始しているが，症例によるバラつきが大きい。今後，良好な ROM の獲得のために，後療法の再考を行う必要があると考えた。

【結語】

術後良好な ROM の獲得の為には，骨折型を理解し，時期に応じた理学療法を行っていくことが必要である。慎重に骨癒合の進展をみながら，早期より肩関節の拘縮・肩関節周囲筋の筋緊張の亢進を予防することが大切である。